

翻刻資料

新収資料紹介『西山宗因独吟百韻』の翻刻

本稿は、関西学院大学図書館蔵『西山宗因独吟百韻』

(30714/A-4542) の翻刻である。本書は『西山宗因全集

第二巻 連歌篇二』⁽¹⁾に収載される『朝霧や』百韻』の

異本である。『西山宗因全集』の底本となった綿屋文庫

本には、明石人丸山月照寺本、沖森文庫本の異本が存在
していることは知られていたが、昨年度関西学院大学に

新収された本書はその沖森文庫本である。箱裏に「沖森

文庫」所蔵印があり、来歴とともに相違ない。端作と賦

物を欠く点や本文の異同も同様である。なお、綿屋本・

月照寺本・本書の三本の前後関係は不明である。

【書誌】

底本 関西学院大学所蔵本。

体裁 紺色料紙卷子装。一軸。箱入。箱には「西山宗因

独吟百韻 宗因自筆」と墨書された紙が同封され

る。見返しには松が四本並び、その上を鳥が三羽

群れ飛ぶ絵柄が墨で描かれる。これは三物「朝霧

やのぼりての代の岡の松／ながめは尽ぬ海づらの

「新収資料紹介『西山宗因独吟百韻』の翻刻

九四

秋／浦風に友よぶ千鳥雁啼て」に照応するとみられる。

寸法 一五・六×二二・〇（糰）。本紙六枚貼継。

成立 延宝二（二六七四）年七月二日。

題簽 なし。

端作 なし。

賦物 なし。

印記 本紙なし。箱裏に「上野本町 沖森蔵」の印。

異本 綿屋文庫所蔵宗因自筆卷子本『播州明石浦人麿社法楽』賦御何連

歌百韻、月照寺所蔵宗因自筆懷紙『賦御何連歌

百韻』

【凡例】

一、本稿の底本には関西学院大学所蔵本を用いた。『西

山宗因全集』の翻刻に拠って、綿屋文庫本、月照寺

本と対校し、異同を示した。

一、異本との異同は、該当箇所括弧（ ）を付して示

した。なお、綿屋文庫本を「綿」、月照寺本を「月」

と略記した。

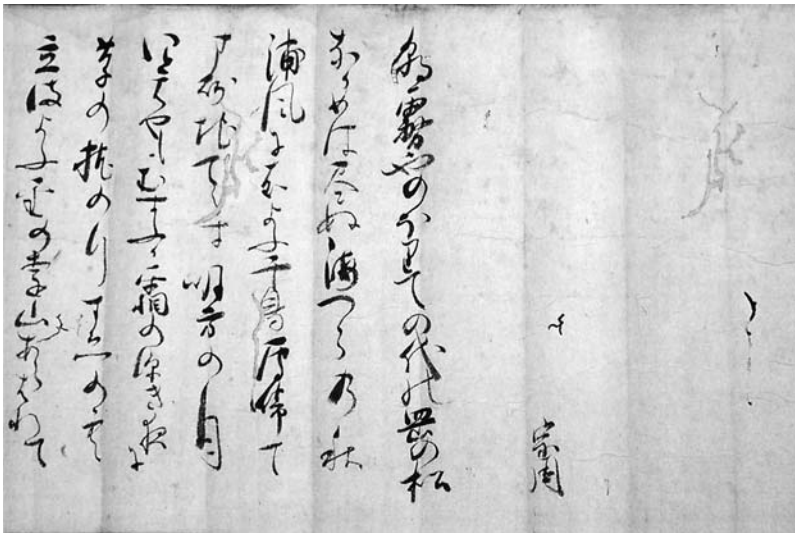
一、翻刻に際しては、以下の事項を除き、原文の表記に従うことを原則とした。

一、旧字・異体字は原則として通行の字体に改めた。

一、本文には読みやすさを考慮し、適宜句読点・濁点を付した。

一、本文中の連歌には、私に番号を付した。

一、端作・賦物・奥書は綿屋文庫本によって補った。



【翻刻】

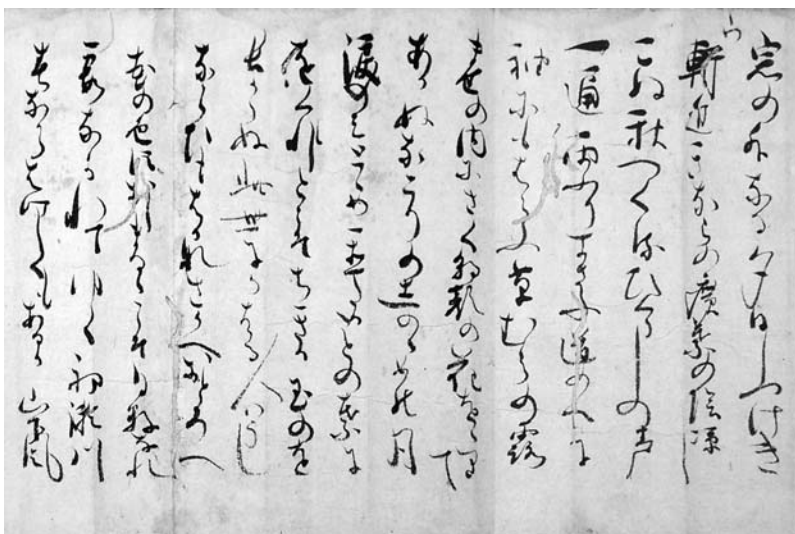
(綿、月・延宝二年七月十一日)

播州明石浦 人麿社法樂)

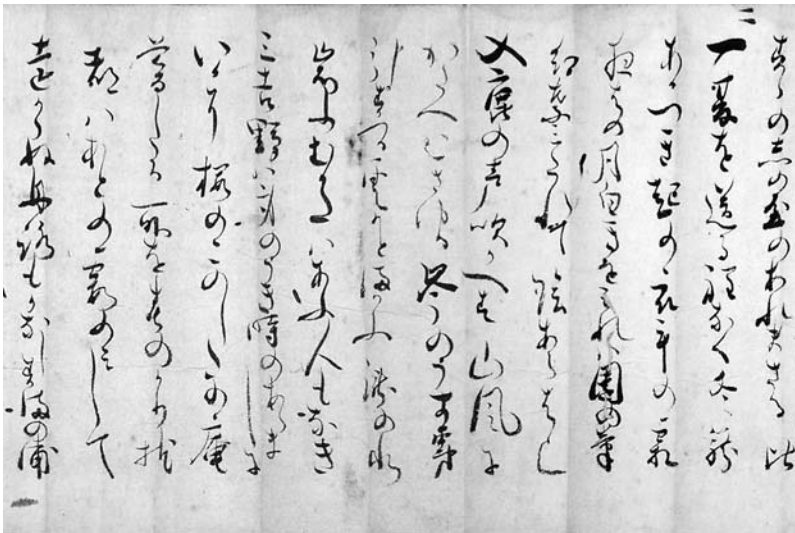
(綿、月・賦御何連歌)

宗因

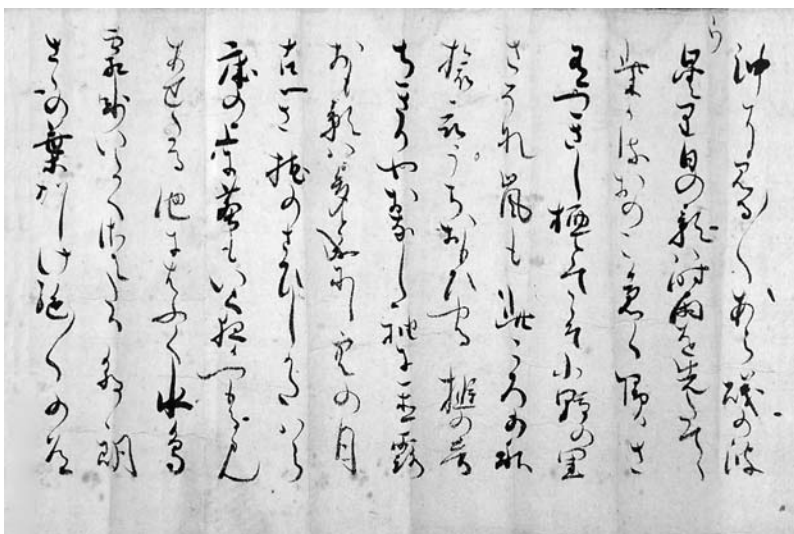
- 1 朝霧やのぼりての代の岡の松
- 2 ながめは尽ぬ海づらの秋
- 3 浦風に友よぶ千鳥雁啼て
- 4 ま砂地てらす明方の月(月・月の明がた)
- 5 いとはやもむすぶか霜の深き夜に
- 6 草の枕の行すゑの空
- 7 立まよふ雪の遠山あらはれて



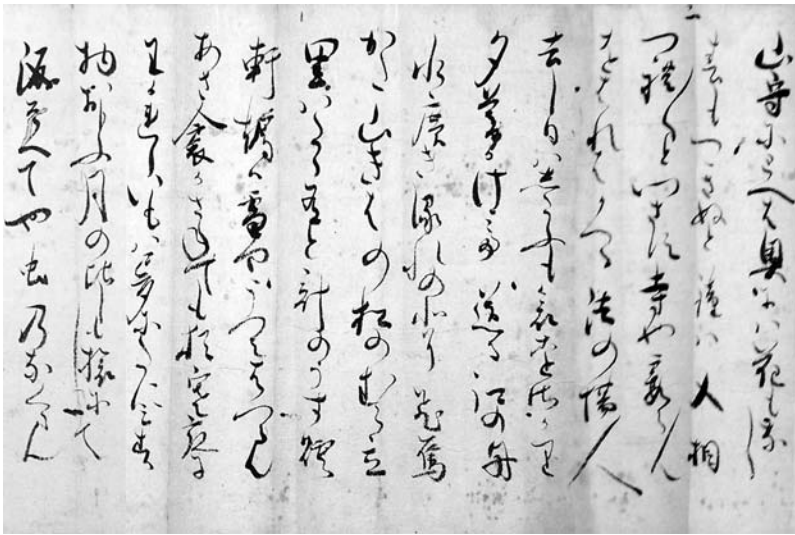
- 8 窓の外なる夕日しづけき
 9 ウ軒近きならの広葉の陰涼し
 10 こぬ秋つぐるひぐらしの声
 11 一通雨ふりすさぶ道のべに
 12 袖にもはらふ草むらの露
 13 ませの内にさく朝顔の花を、りて
 14 あかぬなごりの（月・なごりは）しの、めの月
 15 涙のみとゞめ置たる（綿・かねたる）ことの葉に
 16 をくれじとこそちぎる玉のを
 17 長からぬ此世にかはる人はうし
 18 ならひもはかなさかへおとろへ
 19 花の色におしまるゝこそ（綿、月・おしまるゝこそ
 猶）日数なれ
 20 霞ながれてゆく初瀬川
 21 春ながらはげしくもあるか山風



- 22 すゞのしの屋のあれまさる比
 23 二一夏を送る程なく冬籠
 24 あかつき起の衣手の霜
 25 夜はの月白きをみれば園の菊
 26 紅葉みだれて陰あらはらし（綿、月・陰まばら也）
 27 入鹿の声吹かへす山風に
 28 かたへはきゆる岑のうす霧
 29 引すつる雲かとまがふ瀧の水
 30 岩ふむかたはあふ人もなき
 31 み吉野は身（綿・世）のうき時のあらましに
 32 いか桜のこのしたの庵
 33 暮したる所を春のかり枕
 34 都はあとの霞のみして
 35 遠からぬ舟路もかなしすまの浦

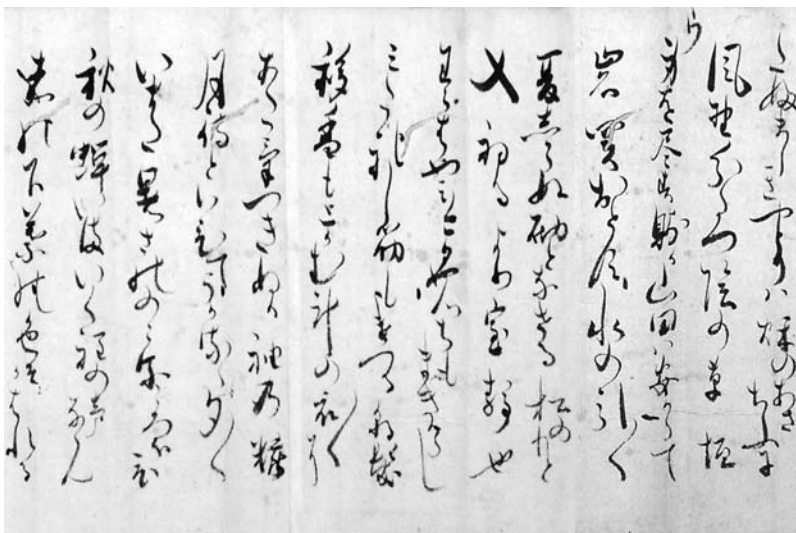


- 36 沖に見るくあら磯の波
- 37 ウ曇り日の影は時雨を先だて、
- 38 柴かるおのこ急ぐ帰るさ
- 39 有つきし栖とてこそ小野の里
- 40 さぞな嵐も（綿、月・あらしもさぞな）此ごろの秋
- 41 旅衣うちおもひやる槌の音
- 42 ちぎりやおなじ袖に置露
- 43 おも影は夢と成にし空の月
- 44 古き枕のさびしかたはら
- 45 床の上に塵もいく夜かつもるらん
- 46 あせたる池にはぶく水鳥
- 47 霜氷いたくさえたる（月・寒ぬる）朝朗
- 48 さゝの葉かしげ絶くの道

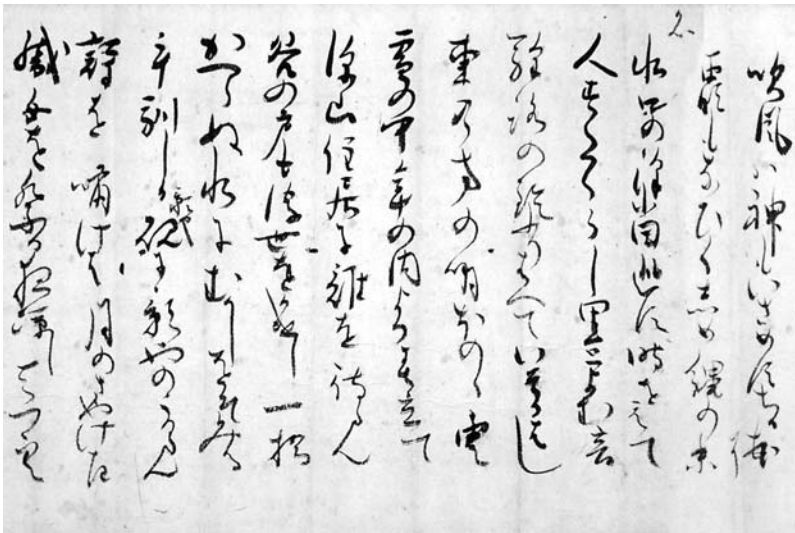


新収資料紹介『西山宗因独吟百韻』の翻刻

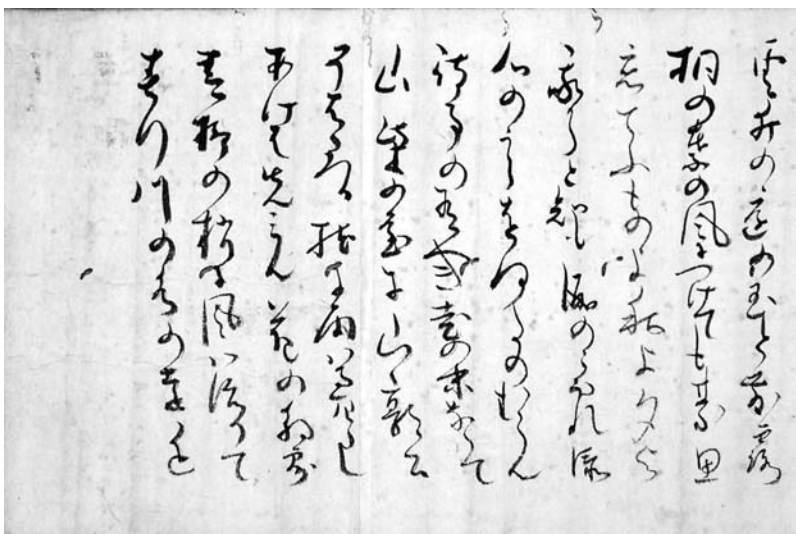
- 49 山守にとへば奥には花もなし
 50 春もつきぬと鐘は入相
 51 一つれくと門さす寺や霞らん
 52 をはればかへる法の場人
 53 去し日は（綿、月・去し日を）したふも哀遠ざかり
 54 夕暮かけて送る江の舟
 55 水広き流れの北に飛鴉
 56 かた山ぎはの松のむら立
 57 里はたゞ有と計のうす煙
 58 軒場は雪や（綿、月・雪や軒端を）うづみはつらん
 59 あさ袈かさねても猶寒夜に
 60 わかれしいもは夢にだにみず
 61 物おもふ月の比し旅にして
 62 涙そへてや虫のなくらん



- 63 たふまじきやどりは秋のあさぢふに
- 64 風野分たつ陰の草垣
- 65 ウ身を尽す賤が山田は安からで
- 66 岩関おとす水の引く
- 67 夏しらぬ砌となれる松のもと
- 68 入初るより室静也
- 69 わらはやみ今日や心ちもまぎるらし(月・まぎるらん)
- 70 みだれし筋も(綿、月・筋を)けづる朝髪
- 71 移香も(綿、月・は)とがむ計の衣くに
- 72 あだ気つきぬる袖の粧
- 73 月待といひてうかる、たく
- 74 いまだ暑さののこるころほひ
- 75 秋の蝉いまいく程の声ならん
- 76 森の下葉の色ぞかはれる



- 77 吹風は神もいさめずちる花に
 78 霞もなびくしめ縄の末
 79 名水口の沢小田返す時をえて
 80 人すだくらし里とよむ音
 81 駅路の鈴ふりはへていそがはし
 82 東の方の（月・かたは）明ぼの、の雲
 83 雪の中年の内より春立て
 84 深山住居に誰を待らん（綿・らし）
 85 谷の戸も浮世をかけし（綿、月・かくる）一橋
 86 かへらぬ水にむかしをぞみる
 87 手馴しか（「か」の右に「影や」と同筆後補）硯に
 影や（綿・かげや硯に）のこるらん
 88 詩を嘯けば月のさやけさ（綿・月ぞさやけき）
 89 織女を（綿、月・七夕を）祭る夜涼し天つ空



- 90 雲井の庭の玉と散露
91 桐の葉の風につけても憂思
92 恋てふものよ秋よ夕よ
93 ウ我からと知も涙の（月・我からのなみだと知も）
こぼれ添
94 心のうらを何たのむらん
95 待事の（綿、月・待事は）有べき老の末ならで
96 山柴の屋に山郭公
97 そばだつる枕に雨は過けらし
98 あげば先みん花の朝露
99 青柳の梢に風は治りて
100 春行川の鳥の遠近
（綿・或人依所望、染老筆。

註(1) 『西山宗因全集 第二卷 連歌篇二』(八木書店、二〇〇七年八月)

本研究は、科学研究費基盤研究(C)(課題番号…24520252)「地方談林俳諧文化圏の発展と消長」西鶴の諸国話的方法との関係から」として補助をうけた成果の一つである。

(もりた まさや・関西学院大学文学部教授)

(くもおか あずさ・関西学院大学大学院文学研究科博士課程後期課程)

(よしだ けんこう・関西学院大学大学院文学研究科博士課程前期課程二〇一三年修了)